

たたかう労働組合・回転寿司ユニオンに総結集して、労使関係正常化闘争を完遂しよう！

労使関係の正常化をめざして

編集・発行：回転寿司ユニオン

10

2026/1/30

ゼンショー・はま寿司、春闘交渉でもきわめて不誠実な対応 日程調整を無視、挙句「申入書、いただいてましたっけ」とすっとぼけ

きょう付の機関紙「回転寿司ユニオン」第51号で、あきんどスシローとの春闘交渉では会社が「ゼロ回答ありき」の不誠実な姿勢を見せつつも、会社側も「これで納得はしてもらえない」という自覚はあるようで、今後の交渉で引き続き粘り強く交渉を続けていくことが報じられている。ところが、ゼンショー・はま寿司では、スシローの「ゼロ回答ありき」の姿勢などまったく霞んでしまう状況が発生しているのだ。

はま寿司への春闘要求の申入れは、スシローとほぼ同時期の1月10日にFAXで送付しており、その中で、①第1回の春闘交渉は、1月末までに開催すること、②日程候補を、1月14日までに提案すること、を申入れている。しかし、待てど暮らせど会社側からの連絡は来ず（もっともこれはいつものことで、回答が遅れる旨の連絡もよこさず平気で2か月後に回答してくることもざらだが）、さすがに業を煮やした組合が、26日に会社側窓口に確認の電話を入れても、詫びるでもなく「申入書、いただいてましたっけ」ととぼける始末である（その後、実務責任者たる人事部長に直接連絡を入れ、間違いなく10日に到着していることは確認済み）。

この情勢下で春闘交渉でゼロ回答を続けるのでもいかがなものかと思うが、それ以前の話でそもそも口クに日程調整もしないなど、論外である。このような会社が、どうやってお客様に満足いただけるサービスを提供できるというのだろうか。

しかし、会社は遅延策を続けて組合が疲弊するのをねらっているのかもしれないが、実際には会社が姑息な手を使えば使うほど、組合員をはじめとする現場ではたらくなかまの怒りはわきあがり、要求実現と労使関係正常化闘争完遂への大きなエネルギーとなるのである。

ゼンセンのみなさん、3単組の「労連」二重加盟を認めていて大丈夫？ ゼンセン=産別も小川賢太郎ゼンショー会長の嫌う「外部勢力」だ

前号後段で取りあげた、小川賢太郎ゼンショーカー会長（当時は社長）への東洋経済のインタビュー（2010年）について、引き続き掘り下げたい。

小川氏は、すき家で未払い問題などの問題を追及していた首都圏青年ユニオンすき家グループ（すき家ユニオン）について、「首都圏青年ユニオンというのは外部勢力が牛耳っているわけですからね。だから、そこと団交するということは不適切ではないかと」などとして、当時問題となっていた団交拒否（都労委で救済命令発出後、中労委、東京地裁、東京高裁まで「ゼンショーが全敗」し、最高裁で和解）を正当化していた。

ところで現在、「ゼンショー労連」やその加盟単組のみなさんは、相も変わらず「労使協力路線」とやらを突き進んでおられるご様子だが、これは「ゼンショー労連」やその加盟単組が「外部勢力」との関係がない=会社が完全にお抱えということの証左だろう。

そうすると、ここでひとつの疑念が生ずる。「ゼンショー労連」のうち、「ジョリーパスタ」「ビッグボーイ」「ココス」の3単組は、歴史的経緯（もともとゼンセンの組織があったところで、ゼンショーが買収）により、産別のUAゼンセンにも加盟している。ゼンセンは、やはり「あくまでも企業内組合の連合体」という日本の産別組織の限界をのりこえる段階にまでは至っていないが、それでも「連合」内の他産別にくらべて、産別の統制が強いとされている。となると、これら3単組は、UAゼンセン=産別という小川氏が大嫌いな「外部勢力」とやらが「牛耳って」いることにはならないだろうか。しかもゼンセンは民社党～民主党～国民民主党の一党支持を続けてきている組織であり、特定の政治勢力との濃密な関係もあるということだ。

2018年には、医薬化粧品産業の一部単組がゼンセンを脱退して新産別「薬粧連合」を結成するという事態もあった。ゼンショー内においても、今後会社がますますゼンセンの影響力を排除しようと蠢いたりはしないだろうかと、他人事ながら心配になってしまう。

ぜひ、ゼンセンのみなさんともご一緒に、正常化闘争の完遂をめざしたいところだ。